



Title	〈書評〉長崎盛輝著「色の日本史」淡交社, 1974年
Author(s)	山崎, 勝弘
Citation	デザイン理論. 1974, 13, p. 94-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

長崎盛輝 著

「色の日本史」

淡交社、1974年

本書は第一章色彩神秘主義の世界に27頁、第二章美的象徴主義の世界に153頁、そして第三章美的機能主義・創造主義の世界に26頁を割り当てられてある。いわば第二章が著者の本命とも考えられる。読み比べてみると、第一章には興味をそそる因子が多いように思われる。交響楽でいえば第一章は前奏曲に相当し、第二章が本番で、もっとも力が入った部分が多い。ところが第三章が前二者の力の入れ方に比べて、余りにも軽くあしらわれている、という印象を受けた。終曲の重味づけと、締めくくりの大切さが、ここでは無視されているのではないかと心なしか首を傾げざるを得ない。この点は真に惜しまれてならない。私も幾冊かの本を書いて覚えがあるが、本番の原稿を書いている間は真夏の太陽のように輝かしく、力強いものを感じ、われ乍ら得意絶頂の感にひたっているが、さて予定の頁数が残り少なくなるに従い、どのように最後をまとめる可きか、という段階に入ると、忽ちペンの走り方が鈍り始める。その頃には疲労も加重され、頭の働きも活潑さを失い勝ちとなる。だからこそ、執筆条件を最善ならしめる努力と工夫が必要になる。

ということは終曲に相当する原稿を最も執筆条件の良い時期に、その大略を書き上げてしまつて、本番の原稿をまとめた後に今一度補筆をし乍ら、気脈が通じるように工夫をすれば、読者は読了後に思わず“ごちそうさま”と言いたくなる訳である。私は著者の人柄をよく知っているので、気まじめに最初から一、二、三の順序で執筆されたのではないかと想像するのである。初めは誰でもそうするのであるが、上記の忠告は先輩が私の初めての著書に対しての忠告をそのまま紹介したに過ぎない。

今一つ本書を手にした時、戸惑いを覚えたことを記しておきたいと思う。私が初めて手にした本を読む時、先ず序文を読んで、著者の執筆目的や考え方の根底になるものが何であるかを予備知識として持つことにしている。「色の日本史」についても同じ気持ちで頁を繰って見たのだが序文らしきものが見当らない。そこで止むを得ず“あとがき”を読んだのである。そこには“伝統色は、それぞれの時代の文化の特色をその色相に反映している。私達は日本の伝統色を通して各時代の色彩生活や色彩観をうかがうことができるし、また

その変遷の中から色彩の不易と流行の相を感じとることができる。そんな考えからまず色というものが人間の生活にどのような意味をもち、どのような役割を果たしてきたか、また私達の先祖がどんな色彩を生み、どう名づけ、それに心をうつしてきたかを、歴史の流れの中で見てゆこうとペンをとったわけである。(中略)”。成る程そういう訳だったのか、とここで序文に相当する文章を発見出来たのでこれらを予備知識として、第一章から読み初めた。著者は“あとがき”の後半において甚だ低姿勢で、“盲蛇に怖じずのそしりを覚悟の上で小書を公にしたわけである。”と記しているが、著者の人柄を知っている人なら、ここで微笑を浮かべ乍らも眼頭をおさえざるを得ないだろう。“よくやったねえ”と彼の肩をたたきたい気持ちがこみ上げてくる思いである。

第一章の細目には“色と心”、“色への関心”、“神秘治療”、“呪術と扮飾”、“呪物と色彩”、“黎明期の色彩名称”などが紹介されており、「一般の人々は日常生活では、いつも色を見ていながら案外それに気づかぬことが多い。そんな時、人は色を全然感じていないかというときにあらず、心は常に何らかの影響をうけている」というふうに感覚、知覚、感情における色との関わり合いを区別すべきであることを主張している。

また「色には表情がある」、「色は生きもの」「という見方は、色を単なる物としてでなく、生き生きと働く者として捉えようとするところからくる。人間の色に対する態度は、本来そういうもののなのである。」という著者の主張は、従来の測色学的色彩論に対する挑戦ともとれるが、そのような主張をもっと強く訴えようとするのなら、簡単でよいから論旨の対象となる色彩論の欠点を指摘しておいた方がより一層効果的ではないかと思う。

「よきこい節」の中のへうちのトイチさんは……のトイチはトと一を合せると上という字になる。上は情に通じるから、うちのトイチさんは“わたしの情人”つまり“いろ”ということになる。流石にその土地の出身者らしい引例で、恐れ入る次第。

「色」という字を分析するとクと巴とが上下に重って出来ていることが判るが、藤堂明保氏の主張を引用しての「裏の学」にも著者の好奇心は相当強いことが忍ばれてほほえましい。

「未開人は身の安全と食糧を得るのにもっぱら己の感覚にたよらねばならない。色覚は敵味方を判別し、食物の有無を確めるために大きな役割を果たすから、適者生存の法則によってすぐれた眼の持ち主だけが生き残る。ところが文明人は感覚に欠陥があってもそれを捕う技術や手段をもつことができるから自然色盲も多くなる、……」というのは一応尤もらしく受けとられるが、他方生物科学における進化論や遺伝の法則から考えて矛盾するのではないか。「日本人の眼」の著者故石原忍博士の説にあるように日本女性は200人に1人の割合でしか色盲、色弱がないということや、欧米人の中には非常に色盲、色弱が多い

ばかりか、文化人の中に碧眼の人が多いから、網膜的条件の上で正常眼の人でもブルーフィルターをかけたのと同じであって、色を正しく判別することが出来ない。このようなハンディキャップの故を以て欧米文化の中から色彩理論が発達し、測色学やカラーコンピュータが開発されたのであるから、上記の考え方は逆説的である。現代人の生物学的機能の低下が、電子工学の発達による便利さが起因となっていることは事実であるとしても、正常眼の者が、色盲、色弱に退化するという考え方には賛成致し兼ねる。

第二章の細目は“色料の発達”、“古代の顔料”、“暈縹の彩色効果”、“初期の古代色名と色調”、“尊卑の色分け——位色と禁色”、“古代の色彩観”、“化粧と色彩”、“平安貴族の色彩感覚”、“源氏の白旗・平家の赤旗”、“張りの色感”、“さびの色感”、“金碧彩色画の色”、“時代色から流行色へ”という多様な内容が153頁にわたってまとめられている。これらの内容は上村六郎、山辺知行、前田千すらの上代染色の研究で有名な学者らによって早くから開発され、多くの人々に紹介されて来たに拘らず、それらの図書は限定版で高額のため、一般読者の目に触れる機会が稀である。その意味においても、「色の日本史」の第二章は有難い気持ちで読むことが出来る。その他多くの古文書からの引用の中に、詳細にわたって、古事来歴を紹介し、写真や線画を適当に入れることによって、読者に退屈させないよう配慮されている。読んで行くうちに第二章こそ「色の日本史」の本命であるという感銘を受ける。確かによくやった、と思う半面、もっと重要な参考文献で洩れているものが相当ある点、残念に思われる。でも貴重な文献は容易に入手出来ないし、蔵書家の立場から考えても貴重な文献は成る可く持ち出して欲しくないだろう。だから本をまとめるということは並大抵のことではないし、折角完成した本を無条件で寝たい気持ちが先になる。でもそれでは書評担当者としての責任が果せない。殊に近親感を持っている尊敬すべき著者に対して、力作の上げ足をとるなんて非人情的なことを引受けたものの立場は、更に苦痛で一杯なのである。何故ならば著書の欠点は著者自身が一番よく知っているからである。しかし乍ら書評担当者としては著者の一番触れて欲しくない部分に非情のメスを突き刺すことになる。

人の世の常として、殊に日本では喜劇よりも悲劇の方が愛好されてきた。人が寝められるシーンよりも人が歎き悲しみ、苦悩と闘っているシーンの方により魅力を感じる、とされている。最近のテレビドラマでもハッピーエンド式よりも哀れな最期で終わっているものが多いのも故なきにあらずである。著者がピエロにされることを読者が望んでいるとは思いたくないが、一旦組上にあげられたら覚悟しなければならぬ。でも書評を書いている中に、「ほんとうのピエロはむしろ自分自身の方かも知れないぞ」と考えるようになった。

さて第三章の細目は“色彩の感情作用”、“色彩の効果”の二つに集約されている。ここ

ではカンジンスキーの「抽象芸術論」を上げ、色彩をピアノの鍵盤にたとえて「色彩は魂に直接的な影響をあたえる手段である。色彩は鍵盤、眼は槌、魂は多くの弦をもつピアノである。画家は、あれこれの鍵盤を叩いて合目的に人間の魂を振動させる手である」といっている。というまえおきの後、“色の寒暖感”、“色の軽重感”、“色の硬軟感”、“色と音”について述べられている中で“色と音”の話は現代若者たちが読んで、大いに感銘するのではないかと想像される。ここでは外国人の学者は多く紹介されているのに日本に唯一人という「共感覚の心理学者」として有名な内藤耕次郎博士が洩れているのは残念である。といっても無理ではない、外国の心理学者の間で内藤博士が有名であっても、当の日本人が知らない場合があることも事実である。その他“色と味”、“色と匂い”、“色彩と形象”、“色彩の興奮・沈静作用”、更に“色彩の効果”の所で著者が大学の講義室で述べているであろう所の「色彩学」の基礎的な諸問題を簡潔にまとめて、全巻の終りとなっている。まさに必読の書というべきか。

(以上)

金蘭短期大学 山崎勝弘